

■さまざまな障害のある子どもたちへの実践事例

学校図書館におけるインクルーシブ教育

～つなぐ・つながるための合理的配慮と基礎的環境整備

鹿児島県霧島市立国分中学校

教諭 松田 ひとみ

はじめに

本校には1年生179名、2年生177名、3年生178名、計534名の生徒が在籍しています。「気づき、考え、行動する国分中学生を育てる」という学校教育目標のもとに、全職員が「確かな学力保障」を目指し「国中スタンダード」の実践に取り組むとともに、「特別支援教育の視点に立つ学習指導」にも積極的に取り組んでいます。また、心の教育の推進の1つの柱として、読書指導の充実にも取り組んでいます。

実践研究の対象について

ユネスコではインクルーシブ教育システムについて、以下のように定義しています。

「インクルーシブ教育は、主流から外されやすい、排除されやすい子どもたちを含むすべての子どもたちの多様なニーズに対応することで、すべての子どもたちの学びが最大限に引き出される教育システム」を構築するプロセスである。

実践研究のテーマについて

本校では、2019年度にマルチメディアDAISY図書の導入を行いました。その後、校内における啓発活動を進めつつ、実践的な活用を続けています。今年度は本校3年目の実践研究となります。

本実践研究では「学校図書館におけるインクルーシブ教育」が大きなテーマとなります。また、テーマの実現を果たすためのサブテーマとして「つなぐ・つながるための合理的配慮と基礎的環境整備」を設定しました。

上記の内容からもわかるようにインクルーシブ教育の対象は「すべての子どもたち」です。

本校において、これまでの研究では特別支援学級に在籍する生徒たちのみを対象としてマルチメディアDAISY図書の研究を進めてきましたが、今回の研究では「インクルーシブ教育」の実現に向けて交流学級に在籍する生徒たちも含めて、すべての生徒を対象としました。

本校生徒の読書離れの現状について

文部科学省が2016年に公開した「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」の調査結果では「不読率（1か月で読んだ本の冊数が「0冊」と回答した生徒の割合）は、小学生が1割未満、中学生が約1～2割、高校生が約3～4割」となっています。

本校においてもふだんから本を読む習慣のない生徒たちがいる現状があります。そのため、朝読書の時間を設定し、生涯読書の習慣が身につく取り組みを行っています。しかし、ふだんから本を読む習慣のない生徒たちの朝読書の様子は「積極的な読書活動」とは遠い景色と言えます。

その原因を生徒たちに聞くと、「小学生の頃はよく図書館を利用していたけれど中学生になって部活動や塾の時間が増え、忙しくて本を読む時間がとれない」という意見や、「もともと読書に興味がないし、本を読んでおもしろいと思ったことがない」という意見が大多数を占めています。これらの意見は文部科学省の調査結果とも通じる部分があり、読書指導を行ううえでも大きな課題の一つと言えます。

実践研究の目的

今回の実践研究では、すべての生徒に対してマルチメディアDAISY図書を

活用した読書活動を取り入れることで生徒たちの心の変化を辿り、本校図書館教育の現状を明るく、より発展的につなぐための方法を探ることを目的としています。

活用に至る流れ

今回の活用においては、応用行動分析のABC分析に基づいて仮説を立てることから始めました。

読書活動に対して消極的な生徒たちは「なぜ読書に対して興味がもてないのか」「なぜ読書に楽しみを見いだせないのか」「彼らの障壁になっているものは何か」という現状から、次のようなABC分析を行いました。

A（先行刺激）

朝読書の時間が始まる。



B（行動）

- ①宿題をしている。
- ②つまらなそうに本をめくっている。



C（後続刺激）

- ①係に注意される。
- ②読んだが、内容がよくわからない。

上記のように生徒たちの様子を観察すると、おもに①と②の2つのパター

ンがみられました。さらに、その背景を確認するためにパターン②の生徒の様子を確認すると、ある共通点がみられることがわかりました。

②の生徒たちが手にしている本は、そのほとんどが図書委員の生徒たちが図書館から選んで持ってきたものでした。

これに対して、積極的に読書をしている生徒たちが手にしている本のほとんどは、彼らが自宅から持ってきた本でした。自分の興味・関心のある本を手にとって読んでいる生徒たちは読書に対して落ち着いて取り組むことができますが、消極的な生徒たちは読書そのものに対して意欲を失っている現状があることがわかりました。

これらの現状を改善するために基本軸としたのは以下の3つです。

1. 難しい本の読書体験から解放する。
2. 読まずに耳で聞く、新しい読書体験をする。
3. 強制されて読書をしている状況を改善する。

本校の図書館教育をよりよく進めるうえで重要なことは、読書活動に対して「積極的な生徒」と「消極的な生徒」がともに読書に対して興味・関心や、喜びを見いだせる手立てを考えることではないかと思います。

さらに焦点化して考えると、より有効な手立てとなるキーワードは、一人ひとりのさまざまな読書ニーズに応える補助具や資料、そしてサービスの提供ではないかと考えます。

このような視点から最も有効な手立てとなるのは、マルチメディアDAISY図書であると考えました。そして、その理由は前述した「3つの基本軸」をすべてクリアできる条件が整っているからです。マルチメディアDAISY図書は「音声読み上げ、文字の拡大、読み上げている文字部分のハイライト」などのアクセシビリティ機能が充実した電子図書です。そのため、読書に対して何らかの障壁を感じている生徒たちにとっては合理的配慮の整ったICT機器と言えます。また、これまでマルチメディアDAISY図書に接することのなかった通常学級の生徒たちにとっては、新しい読書体験につながります。

このような理由から、現状を変えるきっかけを探るためにもぜひ朝読書におけるマルチメディアDAISY図書の活用を行いたいと考え、生徒会と読書指導担当者として十分に検討を重ね、今回の実践を行うことになりました。

マルチメディアDAISY図書活用 の実際

本項では、朝読書における「読書活動に困難を感じていない（積極的に読

書をしている)生徒たちの活用の実際」
と「読書活動に何らかの障壁を感じて
いる(読書に対して消極的な)生徒た
ちの活用の実際」について報告します。

〈使用した本の名前〉

『どろぼうがっこう ぜんいんだつごく』



〈本の情報〉

作: かこ さとし

出版社: 偕成社

わいわい文庫AreaMap2021 101

再生時間: 20分

収納場所: 20-V1

ISBN: 9784032062502

(1) 読書活動に困難を感じていない 生徒の活用の実際



少し意外でしたが、今回のマルチメディアDAISY図書の活用により、朝読書の景色の変化を実施後すぐに感
じることができたのは、読書活動に困難を

感じていない(読書活動に積極的な)
生徒たちでした。

彼らの感想には「みんなが集中して
いるのがわかった」「みんなで同じ本
を読んでいるのに、密にならず安心し
て読書活動ができた」「いつもはおしゃ
べりをしたり、なかには宿題をする人
もいたりするが、みんな静かに聞いて
いた」「1冊の本を一斉読書するという
経験がはじめてでおもしろかった」
など、日頃読書活動に消極的な生徒た
ちの変化を感じるだけでなく、久しぶ
りに絵本にふれて懐かしさを感じたり、
改めて絵本の楽しさを感じたりする生
徒たちも多かったようでした。

私は今回この取り組みについてみんなと

読書ができるのはいいと思いました。

本が苦手な人でも読み聞かせや読書に
取り組んでくれると思います。また普段読ま

ないジャンルにふれることができて良いと思います。

生徒Aの感想

(2) 読書活動に何らかの障壁を感じて いる生徒たちの活用の実際



通常学級にはさまざまな生徒たちが
おり、特別支援学級の生徒たち以外に

も読み書きに困難を感じている生徒たちがいます。それらの子どもたちは読書体験が少なく、読書活動に対して消極的です。

しかし今回の取り組みでは、それらの生徒たちも読書活動以外のことに気持ちを向けることなく、集中して新しい読書体験を楽しむことができていました。



生徒Bの感想

マルチメディアDAISY図書を 活用するうえでの合理的配慮と 基礎的環境整備

興味はあるけれど、読むことに対して困難をもつ生徒たちや、読書そのものに興味をもてない生徒たちの障壁を低くするために設定した3つの基本軸は、合理的配慮の視点に立っています。これは一つの空間で活動する生徒たちのさまざまな読書ニーズを考慮するうえで重要な視点と言えるのではないかと思います。

生徒一人ひとりの教育的ニーズを考慮するうえではすでに各学校においても、ユニバーサルデザインに基づく合

理的配慮や基礎的環境整備が進められています。同じように、学校図書館におけるインクルーシブ教育を進めるうえでの重要な視点は、生徒たちの実態を踏まえて、いかに合理的配慮に基づいた基礎的環境整備を行うかということではないかと思います。

「合理的配慮」の観点(1)

教育内容・方法

〈(1)-1 教育内容〉

(1)-1-1 学習上または生活上の困難を改善・克服するための配慮



○読み書きに困難のある生徒たちにとって読みに対する障壁を取り除く。

アクセシビリティ機能：音声読み上げ、文字の拡大、読み上げている文字部分のハイライト。

(1)-1-2 学習内容の変更・調整



○視覚情報に加えて聴覚情報も併せもった資料の提供。

アクセシビリティ機能：パソコンや大型テレビ、タブレット端末などでの使用が可能、読むスピードを調整できる、個や集団での活用が可能。

〈(1)-2 教育方法〉

(1)-2-1 情報・コミュニケーション及び教材の配慮



○自分の読める本を理解できず、自身の読書ニーズに合わない本を選んでしまう生徒に対して、新しい読書スタイルを紹介する。

アクセシビリティ機能：絵本、物語、紙芝居風、生き物、乗り物、アウトドアなど多岐にわたる作品が用意されている。操作が簡単である。

(1)-2-2 学習機会や体験の確保



○通常の学級に在籍する生徒も読み書きに困難がある生徒も同じ空間で同じ読書体験をする。

アクセシビリティ機能：持ち運びが可能で使用する場所を選ばない、幅広い年齢層で活用できる、来館困難な生徒に対しても活用が可能。

(1)-2-3 心理面・健康面の配慮



○新型コロナ等の感染防止のために密にならない読書空間を作る。

○通常学級の生徒と、読み書きに困難がある生徒が安心した空間で、学年差や性差等に関係なく同じ作品を読む体験を共有する。

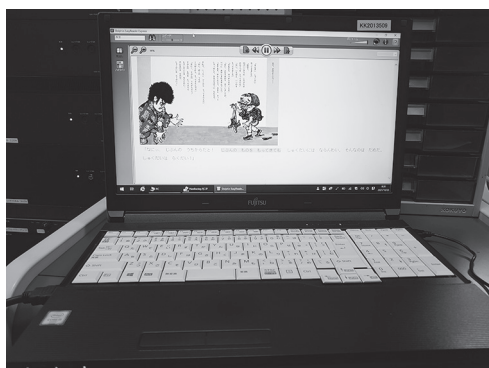
アクセシビリティ機能：学校の実情に応じて密にならない活用方法を検討できる。病弱な生徒に対しても健康面に配慮した使用が可能。

ここにあげたのは「合理的配慮の観点（1） 教育内容・方法」部分に、マルチメディアDAISY図書のもつアクセシビリティ機能をあてはめたものになります。

一人ひとりの読書ニーズに合った活動を考えるうえで合理的配慮についての検討は必須条件となります。マルチメディアDAISY図書のもつアクセシビリティ機能は、すべての子どもたちが高い障壁を感じることなく参加できる新しい読書スタイルを提案するきっかけになりました。

また、今回の取り組みをよりよい読書体験につなぐうえで重要な牽引力となったのは、職員の協力体制でした。基礎的環境整備について考えるうえでは施設・設備について論じること大切要素となりますが、今回の取り組みを通して人のパワーを結集することこそが基礎的環境整備の根底には必要だと感じました。今回の活用では放送室の機器と各教室のテレビをつないで行いましたが、動作確認の際には、読書指導担当者だけでなくさまざまな職員が協力し、知恵を出し合いました。

よりよい活用につなぐためには、専門的な知識をもった職員の存在も大切ですが、学校全体の協力体制がなければ基礎的環境整備を推し進めることはできません。



各学校には通常学級の生徒だけでなく、視覚障害がある生徒、聴覚障害がある生徒、肢体不自由がある生徒、知的障害がある生徒、読み書き障害がある生徒など、さまざまな生徒たちがいます。学校図書館におけるインクルーシブ教育をより発展的に進めていくためにも、生徒の実態に応じた取り組みを学校全体として考えていくことが必要ではないかと思っています。

本校においても、すべての生徒たちが個々の多様性を認め合い、仲間と共に本を通して語り合い、学び合える場となるような図書館づくりを進めていきたいと考えています。

読んだことのない本だったので、
すごくおもしろかった。読む本がない
時にいいと思った。学校全員の
一斉読書で、「おもしろかったねー」
って感想を言い合えるのがいいと
思う。

生徒Cの感想

マルチメディアDAISY図書を 活用するうえでの今後の課題

伊藤忠記念財団がマルチメディアDAISY図書の製作および無償提供を開始したのは、2010年になります。10年以上経ち、導入される全国の学校や図書館が増えています。しかし、実際には熱心に活動される先生方が導入を進めても、なかなか活用につながらない現状があるのも事実ではないかと思っています。本校においても導入してから3年目になりますが、積極的に活用できているという現状ではありません。

マルチメディアDAISY図書は、アクセシビリティ機能が充実した電子図書であり、読み書きに困難をもった子どもたちにとっても、通常学級の生徒たちにとっても有効なICT機器といえます。この魔法のツールをよりよくつなぐためにも、今後は職員体制に左右されない位置づけを考えていくことが大切ではないかと考えます。

実践研究のまとめ

今回の実践研究では「学校図書館におけるインクルーシブ教育」というメインテーマと併せて「つなぐ・つながるための合理的配慮と基礎的環境整備」というサブテーマを設定しました。マルチメディアDAISY図書のより有効な活用を進めるうえでは、このサブテーマが重要なキーワードとなるのではないかと考えます。すべての子どもたちと本をつなぐ手立て、すべての子どもたちが本につながり、図書館につながり、多様な価値観をもつ仲間とつながる手立てを講じなければ、素晴らしいアクセシビリティ機能をもったマルチメディアDAISY図書ですら、存在するだけの電子図書にとどまってしまうのではないのでしょうか。

学校図書館におけるインクルーシブ教育についての考察を進める過程で、全校生徒が書いてくれたすべての感想文を読みました。生徒たちの感想をリフレクションする過程の中には、必ず大切な気づきのキーワードが隠されており、それぞれの学校における読書指導の課題だけでなく、子どもたちの読書環境を明るくするための大きなヒントも隠れています。本校においても

R-PDCAサイクルの過程における子どもたちの小さなつぶやきを大切にしつつ、よりよい図書館教育につなげていきたいと考えています。

人と人との出会いにおいて、第一印象は相手との関係に大きな影響を与えますが、マルチメディアDAISY図書を活用するうえでも同じことが言えるのではないかと思います。よりよく活用するための手立てがあるか、ないかという問題は、つまり合理的配慮がなされているか、なされていないかということにも通じます。インクルーシブ教育は、個人の問題や教師の問題にとどまるものではありません。その空間におけるシステム自体のソフト面とハード面を全体で見直し、検討していくことが必要ではないかと考えます。



特別支援学級での活用